

南アルプス市立白根東小学校

## 令和3年度後期学校関係者評価書

文責 教頭 清水 ゆみ

第2回学校関係者評価委員会

実施日 令和4年1月14日（金）

会場 校長室

参加者 戸栗 淳（評議員） 中込 美彰（評議員） 山本由美子（評議員）  
笹本 忠彦（評議員） 金丸 賢二（評議員） 梶原 強（PTA会長）  
河住 悦久（校長） 清水 ゆみ（教頭） 中島 則雄（教務主任）

### I 学校から提案する内容

- 自己評価結果
- 児童アンケート結果
- 保護者アンケート結果
- 学校評価考察

### II 協議される主な内容

学校評価考察をもとに、学校の現状（成果と課題）や取組等について情報を共有・協議し、学校・家庭・地域の連携協力により学校運営の改善を目指す。

### <学校評価考察>

はじめに

本校では、これまで長年にわたり【やる気・元気・根気・勇気・思いやり】の「五本の木」が校訓として受け継がれてきている。この校訓を受けて、「学びを深め、豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成」を令和3年度の学校教育目標に掲げ、学校長をリーダーに全職員が一丸となって児童の育成に携わっている。また、白根東小学校の目指す児童像は、「情報や考えなどを的確に理解し、判断の根拠や理由を明確に示しながら、自分の考えを述べることができる児童」である。この目標を実現するために、教職員一人ひとりが日々の教育活動に取り組んでいる。しかし、それぞれの教職員がいくら一生懸命にがんばったとしても、目標に向かうベクトルの向きがバラバラでは「学校」として大きな成果は望めない。それはまた、保護者や地域との関係においても同じことが言える。各自の個性やアプローチの仕方は尊重しつつ、チームとして目指す同じゴールに向かっていきたいと考えている。学校評価はそれを検証する貴重な機会であるにとらえ、そこから見えてくる・見つけられる事実としっかり向き合っていく必要がある。

「A」（あてはまる）「B」（どちらかというにあてはまる）を肯定的意見、「C」（どちらかというにあてはまらない）「D」（あてはまらない）を否定的意見にとらえる。自己評価（教職員）はすべて

の項目について肯定的意見が100%となり、児童アンケートも15項目中2項目が80%以上であったが13項目で90%を超えている。さらに保護者アンケートもすべての項目で90%を超えており、全体的にみておおむね満足できる状態であるといえる。また、ここ数年間の集計結果は多少の数値の変動はあるもののほぼ同じような結果になっている。2020年から続いている新型コロナウイルス感染症対策や2021年にスタートしたGIGAスクール構想など、新たな教育活動をどのように進めていくのかも含めて、さらなる高みを目指した取り組みを構築しながら充実した教育活動を進めていきたい。

#### <考察の視点>

令和3年1月に中央教育審議会から、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協同的な学びの実現～（答申）」が出された。また、新型コロナウイルス感染症への対応が続く中で、令和2年度から小学校では新学習指導要領が全面实施となった。「社会に開かれた教育課程」の編成・実施、その基盤となる「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」を通して、子供たちにこれからの持続可能な社会をたくましく生き抜く力を育てていく具体的な取り組みが、ますます学校教育には期待される。そのためにも、学校・家庭・地域社会が協力し連携していかなければならない。「より良い学校教育がよりよい社会を創る」という考え方は「逆もまた真」で、「よりよい社会がより良い学校を創る」と読み替えることもできる。学校と地域社会が「Win・Win」の関係を築いていくことが「学校」にとっても「地域」にとっても大変重要だと考える。

#### <全体的傾向>

自己評価（教職員）はすべての項目について肯定的意見が100%を超え、保護者アンケートでもすべての項目で90%を超えている。また、児童アンケートの肯定的評価は2つの項目（⑪⑬）以外は90%を超えている。全体的に見ておおむね満足できる状態ではあるが、このような結果や要望等から見えてくる課題を見つけ取り組みを進めていくことがさらなる高みを目指すためには大変重要なことである。以下に改善の糸口を挙げる。

#### <課題①>

自己評価（教職員）⑥「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を目指した指導に努めている。」児童評価⑧「授業はわかりますか。」保護者評価④「お子さんは、授業の内容がわかっていると思いますか。」保護者評価⑦「学校は、基礎学力定着のために指導をしていると思いますか。」

自己評価⑥の肯定的評価は100%（A：83 B：17）でA評価も高い。児童評価⑧は肯定的評価が95%（A：71 B：24）と高いものの否定的評価が5%あることは気になる点である。保護者評価④は肯定的評価が91%（A：47 B：44）と高いものの、A評価が低いことは気になる。否定的評価も9%ある。保護者評価⑦も肯定的評価は97%（A：65 B：32）と高いものの、B

評価が32%と高くC評価が3%いることも気になる。自己評価と児童・保護者評価の間に認識の違いがあることは気になる点である。教職員と児童・保護者の到達目標点が違うのかもしれないが、児童にも保護者にもより学力が身についたと実感できるようにしていく必要がある。

また、児童評価⑩「授業（勉強）でわからない時には、先生に聞いていますか。」⑪「授業中に、手をあげたり自分の考えを言ったりしていますか。」については、どちらも否定的な回答が前期アンケート結果より改善されていないといえる。自ら相手に発信することが苦手であることを物語っている。コミュニケーションが苦手な児童がいると考えられるので、スキルを身に付ける指導や、コミュニケーション能力の底上げを丁寧に行う必要があるといえる。さらに、授業での指導方法の工夫や児童自身が安心して考えを発表できる環境づくりに今後も今以上に力を入れていく必要がある。

#### <課題②>

児童評価⑥「学校は楽しいですか。」について、CとDを合わせた回答が9%となっている。コロナ禍の中で感染症防止対策をとりながら学校行事も開催されてはいるが、制限されることもまだまだ多い状況でもあり、学校生活の全てが通常に戻っているわけではないことも影響していると思われる。子供たちにとって学校が楽しいと感じることは学校生活を送る中でとても重要である。一人ひとりに寄り添った支援・指導を実践していくと同時に、児童相互の関わり合いから自己肯定感や自己有用感がもてるような集団づくりに全校で取り組んでいく必要がある。また、児童に「学校で一番楽しみなこと」について記述式のアンケートをとったところ、教科学習が楽しみだという回答と共に、休み時間や給食・友だちとのおしゃべりなどが多く書かれていた。数値では測れない児童の違った一面を垣間見る手掛かりになるのではないだろうか。

#### <課題③>

児童評価⑬「学校での様子を、家の人に話していますか。」保護者評価①「お子さんと、学校の様子などを話していますか。」児童評価⑬の肯定的評価は86%（A：61 B：25）とまずまずではあるが、否定的評価14%（C：7 D：7）は気になる数字である。また、保護者評価①も肯定的評価は98%（A：73 B：25）と高いものの、B評価は25%と課題を残している。保護者評価が比較的高いのに比べ、児童評価が低いことが気になる。児童が「あまり話していない」と感じているという点はやはり気になる。それぞれの家庭が抱える事情は様々であるが、家庭での会話を少しでも増やしていきたい。学校の様子を知ってもらうことや学校の教育活動への理解が進むことは、連携を深めていくためには欠かせないことであるといえるのではないだろうか。

#### <課題④>

自己評価（教職員）⑫「保護者・地域（及び関係機関）との連携・協力を努めていますか。」保護者評価⑭「学校は、保護者や地域と連携・協力し、より良い教育活動を進めようとしていると思いますか。」

自己評価⑫では肯定的評価は100%（A：74 B：26）で、前期と比べて約7ポイントA評価が上がっている。しかし、保護者評価⑭では肯定的評価は96%（A：64 B：32）と高いが、A評価が前年度より3ポイント下がっている。感染症拡大防止策を講じる中で、例年通りに学校行事や校外学習、学習活動が実施できたわけではなかった一年であった。しかし、「教育活動」は学校だけで完結できるものではなく、「保護者や地域」の協力なくしては成り立たない。今後も、連携協力を積極的に推し進めていけるような体制を考えていきたい。

#### <課題⑤>

保護者評価⑨「学校は、子供の困ったことや悩みなどに対応していると思いますか。」と、⑩「学校は、仲間はずれ・いじめ等を認めない指導をしていると思いますか。」については、肯定的な回答が得られている一方で、子供の困ったことや悩みへの対応や、いじめや仲間外れ等の指導について、CとDの合計が5%と6%となっている。児童一人ひとりに寄り添い保護者からも信頼されるよう教師の学級経営力を高めていくような努力を今後さらに進めていかなければならないだろう。対応策としては、今年度の校内研究で取り組んできた「学級経営の充実」に向けて継続し、学校全体で強化していくようにする。具体的な取り組み方法については、校内研究とも関係づけていきたい。また、保護者評価⑫の「学校は、保護者の相談に、ていねいに対応していると思いますか。」については、A評価が71%であった。⑨の項目と同様に、子供にも保護者にも相談されることに対して、子供や保護者の話をじっくりと聞き、困り感に寄り添いながら一緒に考え対応をしていきたい。また、担任が一人で抱え込まないように学校体制で対応していくことも視野に入れ、学校への信頼関係を構築していくことも大事なことである。

### Ⅲ 出された質問・意見、対策

- ・教師アンケートに関する項目の9「児童理解の基つき、ルールとリレーションのある学級・学年集団づくり努めている」について、ルール・リレーションとは、どのようなことか。
  - \*「ルール」とは、学級・学年などの「決まり・約束」を示し、「リレーション」とは、「関係・つながり」を示す。ルールとリレーションのどちらも学級・学年集団作りにおいて重要である。
  - ・スマホや携帯について学校では、決まりがあるのか。
    - \*学校に持参する場合には、申請書の提出が必要。また、学校へ持参してくる児童は、毎日、登校後に職員室へ預けて、下校時に職員室に受け取りに来ている。
  - ・児童アンケートに関する項目の6「学校は楽しいですか」について、なぜ楽しくないのかという理由を子供から聞き、改善できるようにしてほしい。
    - \*児童アンケートについて各児童の結果をもとに児童から話を聞いて対応していくことが必要。
  - ・児童アンケートに関する項目の8「授業は、わかりますか」について、低学年時から授業が分からないまましていると、その後にも影響がでてくる懸念される。
    - \*わかる授業づくりを進めるとともに、児童の実態を見ながら授業改善に取り組んでいく。

#### Ⅳまとめ

2021年、社会の変化とともに人々の生活様式も大きく変わり、学校教育においても同様のことが言え、with コロナ、ポストコロナ社会において子供たちの学びの転換が求められていることは否めない。オンライン授業への対応や一人一台端末環境の整備と対応をするかたちで、中教審からは『令和の日本型学校教育』（中間まとめ）が示され、「個別最適な学び」と「協同的な学び」が取り上げられ、それぞれの学びの往還が大事と示されている。

『不易と流行』。教育には、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて価値のあるものがある。一方で、時代の変化とともに変えていく必要があるものに柔軟に対応していくことも求められている。しかし、どれほど時代が進もうと、どんなに新しい教育理論が打ち出されようとも、あるいは、どれだけ斬新的な指導法が展開されたとしても、私たちの願いはぶれることなく、目の前にいる子供たちの健全な育成である。学校長をリーダーに「チーム東小」として全職員が力を合わせ、常に同じ方向を向き、日々教育活動に臨んでいる。

また、「東小の子供たちのため」という思いは、学校も保護者も地域も全く同じである。自己評価・児童アンケート・保護者アンケートにおいて、いずれもおおむね満足できる状態ではあるが、「地域の強い思い」「地域の教育力」を大事にし、お互いにコミュニケーションを図りながら連携を図っていくことで本校の学校教育目標の実現につながっていくと確信している。「児童が通いたくなる白根東小学校」、「保護者が通わせたい白根東小学校」、そして、「教職員が勤務したくなる白根東小学校」となるように、学校・保護者・地域のベクトルの向きを同じくして取り組んでいくことが、一番大事なことである。